

江東区でもっとサッカーしよう
江東区のサッカーを応援しよう
江東区のスポーツを応援しよう

江東区だけをホームタウンとして
2021年にJリーグ参入
始めています地域貢献活動

江東ベイエリア・フットボール・クラブ

〒136-0075 東京都江東区新砂3-7-1 バイエリア・グランド内
ホームページ <http://www.bayarea-fc.com> メールアドレス mail@bayarea-fc.com

2017年6月19日

江東ベイエリアFC代表・渡辺

[である調] で表記させていただきます。

同級生の日本代表監督・西野朗氏

- ロシアW杯に臨むサッカー日本代表監督に就任した西野朗氏は、高校サッカー部で同窓であった。
- 就任直後より、同級生だった私に、メディア（一般新聞・スポーツ新聞・TV・ワイドショー等）から10件近くの取材依頼（高校時代の西野氏について）があった。
- 日本サッカー協会幹部がメディアに対し、西野氏の高校同級で最も仲が良かったのが江東ベイエリアFCの渡辺だと発したためである。
- 取材を受ける事に逡巡したが、「江東ベイエリアFC」と表記される事に利を感じ、応諾する事とした。
- 各メディア共、1～2時間の取材であったが、既に掲載されたものもあるが、殆どは今後の日本代表チームの試合結果に左右される仕込み物であるため、多くは掲載されないものと思われる。
- 今回、皆様に西野氏との仲についてご案内させていただくのは、W杯に臨む日本代表チームを監督の視点からも応援していただきたく、また、私のサッカーキ

キャリアから「江東ベイエリアFC」の運営理念や指導方針等について理解を深めていただきたいためである。

埼玉県立浦和西高校サッカー部

●当時、全国での高校サッカーの強豪地域は、埼玉県浦和市と静岡県藤枝市であった。

●浦和市では、浦和高校、浦和西高校、市立浦和高校、浦和南高校の4校が凌ぎを削っていたが、当時は、3学年上で全国3冠（総体、国体、選手権）を制していた浦和南高校、1学年上で正月の選手権を制していた市立浦和高校に中学の有望選手が多く集まっていた。

●埼玉県中学選抜選手で当時から全国的に著名であった西野氏はサッカー強豪高校ではなく、大学進学を見据えて浦和西高校を選択したとの事であった。

●高1の頃より「超高校級」と評されていた西野氏は、長身・俊足ながら卓越したボールコントロールで、相手選手の足が届かない所にボールを運び、華麗に何人でも相手選手をかわしてゴールを決めていた。

●西野氏と私が最上級生となった全ての公式試合で、負けたのは2試合だけであった。1試合は全国総体（インターハイ）埼玉県決勝で、負けた相手チームは全国大会で優勝した。負けたもう1試合は、正月の高校サッカー選手権大会の本大会だった。

●埼玉県内に限らず関東大会等でも圧倒的強さで優勝を重ねていった浦和西高校は、正月の高校サッカー選手権本大会では優勝候補筆頭に挙げられていたが、準々決勝後半ロスタイムの私のミスから敗退となった。

●「超高校級」であった西野氏には、高3時に日本代表チーム招集を打診されていた（その時は断ったが、大学1年時に代表入りした）。数十年に一人の逸材といわれていた西野氏には当時の日本リーグ（現在のJリーグ相当）のチームから多くの勧誘があり、それ故、高校チームとしては珍しく日本リーグの多くのチームと練習試合を行うなど貴重な体験が出来た。

●今回のメディアの取材で、「高校時代の西野監督を一言で表すと？」と度々質問され、「クール」と回答した。冷静沈着と恰好良いの意味である。友達付き合いも良く性格も良い西野氏だが、試合中は激しいプレーの中でも冷静に先々の試合展開を読んでいた。もう一つの「クール」は、メディアでもたびたび取り上げられているが、とにかく「もてる」のである。

●今回も西野氏の「もて伝説」がメディアで多く紹介されているが、私も大学時代の西が丘サッカー場での公式試合終了後に一緒に帰宅するために待っていた事を思い出す。出待ちの100名以上の女性ファンから抜け出した西野氏の両腕には抱えきれないほどの

プレゼント。私も手伝い、帰り際、ほんの少しだけお裾分けいただいた事も度々あった。

最後の最後まで「お荷物」だった

- 不良の先輩から強引に誘われ中学3年生からサッカーを始めた私は、高校進学後のサッカーには思いを馳せずに、確実に合格できる浦和西高校に進学した。
- 入学後サッカー一部に入部したが、当初から同級生の中でも惨めになるほど「ヘタ」であった。バイエリアFCの小学生選手には言えないが、高1の頃のボールリフティングは10回も出来ないほどであった。内緒です。
- 仲間と一緒に試合に出たい、迷惑を掛けたくないとの思い（当時は純粹でした）から、毎日早朝に学校に行き校庭で自主練習を行った。最も意欲が高く集中していたように思う。当時、思いを寄せていた同級生の女子から卒業数年後に、「渡辺君はいつも朝から汗臭かった」と。
- 不良の巣窟のような中学部活サッカー一部出で「ヘタ」であった私の高校3年間のサッカー活動では、最初から最後まで「お荷物」であった。
- 入学式の新入生代表の挨拶に朝礼台に上がった私は不良そのものの髪形と制服。私の挨拶が届かないほどのドヨメキが続いていた。高校の正門前や近くの駅には、都内の不良高校生達が私の出待ちをしていた。

西野氏のファンの出待ちとは大きな違いだ。他校との試合中や試合後の喧嘩で何度監督から殴られた事か。正月の全国選手権埼玉県決勝がTV中継されると知り、人一倍筋力トレーニングを励み長いスローインを投げられる私は、TVに大写しとなるだろう事を見越して何度もやり直しをして、ハーフタイムに監督から「まじめにやれ」と叱責された。TV中継後、西野氏にはダンボール2箱の全国からのファンレター。第2位が私の1通。スローインによるものと思われた。

●「お荷物」の最後の極め付けは、正月の全国選手権準々決勝。関東大会で大勝した対戦相手に圧倒的に押しながら0-0で迎えたロスタイム。焦っていた私がフリーキックをミスして相手に渡し、そこから失点し敗戦。大会後の3学期には、しばらくの間、学校に行く事が出来なかった。

高校卒業後

●西野氏と私は、お互いに早稲田大学でサッカーを続ける事を約束していたが、正月の全国選手権で自失していた私は将来日本リーグでプレーする事を諦め、慶応大学に進学した。

●西野氏とは、当時、日本で最もレベルが高いと言われた関東大学サッカーリーグだけでなく、毎年、国立競技場（当時）で行われていた早慶サッカー定期戦でも対戦したが、4年間で1勝しただけであった。

●大学在学中から日本代表選手となった西野氏は更に成長し、卒業後は日本リーグの強豪・日立製作所（現・柏レイソル）に進む。西野氏の母親から入社前に多くの最新家電を寄贈されたと聞いた私の母親は、東京ガスに内定していた私に「ガス（気体）を貰ってもねー。」と。

長文にお付き合いいただき有難うございました。

今回、皆様に西野氏との仲についてご案内させていただくのは、W杯に臨む日本代表チームを監督の視点からも応援していただきたく、また、私のサッカーキャリアから「江東ベイエリアFC」の運営理念や指導方針等について理解を深めていただきたいためであります。

「もて伝説」が注目されている西野氏であります、将来の日本サッカーの指標となるような試合内容を期待しています。

「センテンススプリング」など週刊誌が予定稿を準備している事が気がりですが。